

祝「うえまち」創刊20周年!

「うえまち」は2025年4月、20周年を迎えます。

web版では街ネタ・グルメ・イベント・歴史・教育・子育て・福祉・医療など地域情報を紹介。創刊号(2005年4月号)からのバックナンバーもご覧いただけます。

うえまち新聞
web版



上町台地界隈の情報紙

揮毫 一心寺長老
高口恭行師

うえまち

since 2005

第234号

2025年3・4月号

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
✉ uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

うえまち新聞
web版



「上町台地」名所図会

第29回

織田作之助と
上町台地(天王寺区)

「大阪は木のない都だといわれているが、しかし私の幼時の記憶は不思議に木と結びついている」(『木の都』より)

織田作之助は有名なこの一文を、生國魂神社界隈を思いながら描いたのです。

織田作之助(通称、オダサク)は生玉さんの向いの生玉前町(いまの上汐4丁目)に生まれます。第三高等学校(現在の京都大学)に入学するまで、上町台地周辺で過ごしました。『木の都』はじめ『わが町』『アド・バールン』など、オダサク作品に上町台地を舞台にしたものが多いのはそのためです。

文学に目覚めたのは高津中学(現在の高津高校。写真左)の時で、当時から高津は自由な校風で知られ、文学仲間と夜の街に向くこともあったようです。『夫婦善哉』で描かれたうまいもの巡りも、このころから始まったと言います。

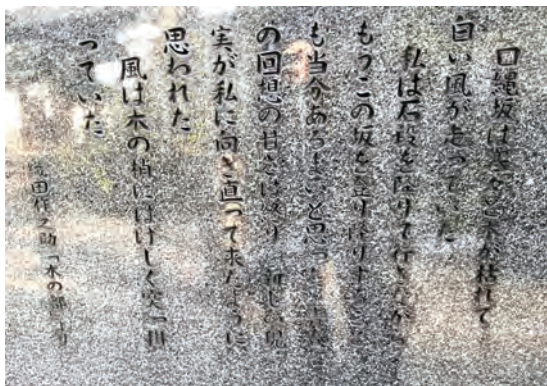
ちなみに、高津高校の出身者に無頼派的な作家が多いのはなぜなのでしょう。『仁義なき戦い』の飯干晃一、直木賞作家の藤原伊織、『夜を賭けて』で知られる梁石日など、オダサクの影響があるのかどうか。

代表作の『夫婦善哉』を書いたのは1940(昭和15)年で、亡くなったのはそれから7年後の1947年です。享年33。いまは天王寺区城南寺町の楞嚴寺(りようこんじ)に眠ります。

各地に文学碑が残りますが、ぜひ見て欲しいのが口縄坂にあるそれで(写真右)、『木の都』の一節が刻まれています。また、生國魂神社には織田作之助像が建ちます。ハットを被りマントを翻した、いかにもオダサクらしい姿がうれしいですね。



自由な校風で知られる高津高校(旧高津中学)



口縄坂の文学碑には『木の都』の一節が刻まれる

中原文雄／写真

1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。

松本正行／文

1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

※名所図会(ずえ)とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「うえまちweb」(<https://uemachiweb.com/>)連載の「『上町台地』名所図会」より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。

質屋(しちや)のことを、大阪ではヒチャと発音する。看板にも「ひち」と書いてあるので、シチャでは通用しない。

「質屋で何屋」は、「かまと」の代名詞である。蒲魚(かまと)は、「蒲鉾は魚か」ととほける人のことで、初心(うぶ)の振りをしているが実はすれている、特に女性のことだ。

質と同様に「七」もヒチと発音し、七福神、七面鳥は、ヒチ福神、ヒチ面鳥である。

質屋は奈良期にまでさかのぼる。寺院や豪商が品物を預かってお金を貸したのが始まりだ。鎌倉期に発生し室町期に発達した「土倉(どそう)」が質屋のことで、酒屋が兼業した。江戸期になると、専門の質屋が繁栄し、庶民の重要な金融機関になった。現代では、サラリーマン金融が隆盛を見せて、その影がうすくなった。

質屋に預ける物品のことを「質草」又は「質種」と言う。本来、「質」とは、約束を履行するために保証として預



相羽秋夫の

らくごハローワーク

質屋

第39 職

今宵また妖怪うごめく『質屋蔵』

ける品の意味で、今日、担保と呼ばれるものである。人質という言葉も、ここから出ている。

一定の期限に元金と利息を払わないと、預けた品物は「質流れ」する。利息だけを払って期限を伸ばしてもらうことは「利上げ」と言う。

こんな川柳がある。

「かりうどは質屋の使い上手なり」は、かりうど(居候)は質屋の扱いがうまくなるの意である。「待人来たらず質屋へ禿(かむろ)行き」は、遊女も客が来ないとお金に困り、禿を質屋に行かせる。また「無造作なものは質屋の土用干し」は、預かった品を、土用の日に虫干しするが、自分の物ではないのでぞんざいに扱うと皮肉る。

そんな質屋の蔵で発生した珍事件の一席。

大きな質屋の三番蔵に化物が出るの噂が立つ。旦那が番頭と手伝いの男に寝ずの番を命ずる。その夜、質草の掛軸の一つが動き出し、菅原道真の絵から、なんと本人が抜き出てきた。

通報を聞いて三番蔵にやってきた旦那に対して、道真が口を開く「質の置き主に伝えてくれ。早く利上げをせんと、また流されてしまう」。



NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

お問い合わせはNPO法人「まち・すまいづくり」まで
TEL:06-6779-7222

住まいと

暮らしの総合

無料相談会

4月12日・5月10日・

6月14日(土)10時〜12時

弁護士、司法書士、一級建築士、税理士、宅地建物取引士の当法人会員が専門知識を生かし、住まいと暮らしのご相談に応じます。電話またはHPよりお申し込みください(電話受付は平日10〜15時)。

主催：NPO法人まち・すまいづくり

電話：0667797222

場所：大阪市立社会福祉センター(天王寺区東高津町12-10)

後援：天王寺区役所

第47回

うえまち寄席

3月29日(日)

13時30分開場、14時開演

桂佐ん吉、桂米之助による、古典を中心とした落語会です。電子チケット販売サイト(TIGET(チゲット))からも予約可能です。

場所：一心寺南会所(天王寺区逢坂2-7)

入場料：前売2500円

当日3000円

相羽秋夫「らくご」

シリーズ絶賛発売中!

本紙連載中の「らくごハローワーク」を収録した「らくご職業博」ほか「らくご動物園」「らくご植物園」(相羽秋夫、東方出版)発売中です。

うえまち

since 2005
第235号
2025年3・4月号

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX：06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
✉uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

うえまち新聞
web版



「上町台地」名所図会

第30回

撰津酒造跡
(住吉区)

NPO法人まち・すまいづくりは、2024年に、創業20周年を迎えました。

これを記念し、「勝ち虫」の吉祥文様、トンボづくりの伊勢型染めオリジナル手ぬぐいを販売しています。
詳細・お問い合わせは、NPO法人まち・すまいづくり(TEL:06-6779-7222)までお問い合わせください。



いまや、世界5大ウイスキーのひとつに数えられる日本のウイスキーですが、本格的なウイスキーづくりが始まったのは1923(大正12)年のことでした。製造の指揮を執ったのは竹鶴政孝。彼と妻・リタはNHKの朝ドラ『マッサン』(2014年放送)のモデルにもなったので、存じの人も多いでしょう。当時の竹鶴は寿屋(いまのサントリ)の社員でした(のちに「ツカウキスキー」を創業。実は、寿屋に勤める前は帝塚山にあった撰津酒造の社員だったのです。住まいも帝塚山にありました。ウイスキーづくりのための英国留学も社命だったのですが、第二次大戦後の不況により、国産初のウイスキーを、という撰津酒造の計画は頓挫します。予定どおり進んでいけば、「国産初の栄冠」は上町台地の会社がかかっていた可能性もあったわけですが。

さて、1964(昭和39)年に撰津酒造は宝酒造(いまの宝ホールディングス)に吸収され、その大阪工場となりました。しかし、73年に工場は閉鎖、神ノ木公園にある取水口跡がモニメントとして残ります。また、顕彰碑(写真左)が地元のライオンスクラブの寄贈で建てられました。

一方、撰津酒造のあった場所から400mほど北にある帝塚山学院小学校(写真右)では、妻のリタが一時期、英語の先生を務めていました。古い卒業アルバムには「竹鶴先生」の写真も掲載されています。いまも上町台地は「ジャパニーズ・ウイスキーの源流」の名残をとどめているのです。



国産ウイスキー縁の地に残るモニュメント



「ウイスキーの父」の妻が勤めていた帝塚山学院小

中原文雄／写真

1948年生まれ。建築工房日想舎 主宰。NPO法人まち・すまいづくり会員。

松本正行／文

1965年生まれ。ライター・編集者。NPO法人まち・すまいづくり会員。

※名所図会(ずえ)とは名所の来歴などを絵も交え紹介したもの。
※「うえまちweb」(<https://uemachiweb.com/>)連載の「『上町台地』名所図会」より、みなさまからの反響が大きかったものを、本号外でも掲載いたします。



相羽秋夫の

らくご
ハローワーク

猟師

第40 職

評判の『池田の猪買い』に遠出する

病弱な体に効果があるという、男は池田(大阪府)の山奥まで猪の肉を買いに行く。

新鮮なもののほど体に効くと助言されている男は、3日前に捕ったものでは納得しない。猟師は仕方なく男を連れて山の中に入り、1頭の猪を仕留める。

男が、その猪を「これ新しか」と疑うので、猟師は銃で猪の尻を打つ。仮死状態だった猪は、その衝撃で走り出す。それを見て猟師「客人、このとおり新しい」。

◇

山リヨウシは「猟師」、海リヨウシを「漁師」という漢字で区分する。猟師には2種類あって、個人で狩猟する場合と共同で作業する場合がある。個人では、鳥もち・罾(わな)・弓・猟銃などを使って、鳥類や小動物を対象にする。必ず犬を伴い、その協力によって相手を捕える。



共同での捕獲対象は、鹿・猪などの大型なものが多い。東北地方とくに秋田県では、「またぎ」と呼ばれる20人ぐらいの集団が存在する。彼らは、共同生活を送り、スカリと称する頭目を中心に規律ある行動をしながら狩猟をしている。

その行動の骨格は、山の神へのさまざまな儀式、狩猟期間の厳しい禁忌(きんき)タブー、獲物の分配法、などである。

彼らの間には、「山言葉」と呼ばれる、いわゆる隠語が80語ほど存在する。いくつかの例をご紹介しますと、米のことを草の実、水をワツカ、狼をやせ、熊を黒毛又は山の人、犬をセタと言ひ換える。

これらは、アイヌ語からの借用が多いとされる。獲物に感づかれないように、彼らだけの特有の呼び方をしたのである。

山言葉は部外者に知られぬよう、絶対に秘密とされた。それが、より一層「またぎ」を神秘的にしている。

老人の猟師の哀感を歌った春日八郎の名曲『山の吊橋』を、ぼたん鍋を囲みながらぜひ唄って欲しい。猪肉が一層うまくなるはずである。

大阪市博物館機構
展覧会情報

大阪市立美術館

4月26日(土)〜6月15日(日)

大阪・関西万博開催記念
大阪市立美術館リニューアル記念
特別展「日本国宝展」

大阪歴史博物館

4月4日(金)〜5月26日(月)

特別展「一全日本刀匠会50周年記念ー日本刀1000年の軌跡」

大阪中之島美術館

3月29日(土)〜6月1日(日)

「生涯150年記念 上村松園」ほか

大阪市立

東洋陶磁美術館

開催中〜3月30日(日)

大阪市・上海市友好都市提携50周年記念
特別展「中国陶磁・至宝の競艶ー上海博物館×大阪市立東洋陶磁美術館」

大阪市立

自然史博物館

開催中〜5月6日(火休)

特別展「貝に沼るー日本の貝類学研究300年史ー」

大阪市立科学館

開催中〜4月6日(日)

企画展「万博で夢見たサイエンス展」